

□書 評

中村恭一 著

胃 癌 の 病 理

——微小癌と組織発生——

大阪府立成人病センター病理

谷 口 春 生

本邦において最もポピュラーな癌であるはずの胃癌とそれをめぐる胃疾患について、病理形態学に関するモノグラフは皆無にひとしい。本書は、日常胃癌の診療にたずさわる臨床医にとっても、また胃癌の病理に興味をもつ基礎研究者にとっても、必読の書であり、刊行が待たれていた。著者・中村恭一博士の並々ならぬ御努力に深甚な敬意を表する。

胃癌の発生に関しては、潰瘍癌をはじめとして歴史的に論争が繰り返されてきたことは本書にも詳しく記されているが、著者はその歴史を背景に加えて、特に副題にもあるように、胃癌の成長に従って現われる修飾像が最小であるべき微小癌病巣の知見を軸として、胃癌組織発生の解

析を試みている。殊に、胃底腺の加齢的な非可逆の退縮を綿密な組織検索にもとづいて実証し、それを基盤として、電顕レベルの細胞学的形態に裏打ちされた所見から、胃癌の組織発生論に肉迫している。

異型の増殖を本態とし、加えて胃に発生したという臓器特異性による修飾もあって、肉眼的にも組織学的にも多彩な形態を表現し、多彩な進展様式をとる胃癌を、固有胃粘膜上皮・化生腸上皮の2種の細胞起源に整理して作業仮説を設け、その根拠を示しながら症例に当てはめて帰納し、実証してゆく展開は、強く読者を説得するであろうと思う。殊に病理形態学は、実験病理は別としてstaticな材料を扱う機会が多く、為

に主観に流れやすいが、胃癌も胃粘膜も共に経時的に動きのあることを意識して、病理形態学の限界内で推論をすすめる姿勢は、病理学の基本的な方向を示すものであろう。

本書には、胃癌を中心として胃の悪性・良性諸疾患の解説もあり、引用文献も網羅されている。また、巻頭には、適切な電顕写真も含めて正常胃の組織学の記述がみられ、医学生や関連のあるパラメディカルの人達にとっても、すぐれた参考書である。もちろん、本書は単なるいわゆる参考書ではなく、著者の一貫した病理学者としての姿勢と主張が読み取られる。

本書の随所に剔出胃材料の全剖面についての組織検索の写真がみられるが、地味で大変な努力を要する仕事である。著者・中村恭一博士の人柄に負うところが大きいとはいえ、癌研という伝統のある場と、周囲の方々、殊には膨大な組織標本の作製にたずさわる検査技師の方達に、併せて敬意を表し、今後の発展を期待申し上げる。

頁 288・図 445・表 67

¥ 7,000・1972・金芳堂刊